

札幌開建におけるコロナ禍におけるかわたび ほっかいどうの取組の推進について

札幌開発建設部 河川計画課

○北谷 沙紀子
大島 省吾

第8期北海道総合開発計画のもと、川の自然環境や景観、水辺の活動、サイクリング環境等、川に関する情報を効果的に発信するとともに、地域と連携して、魅力的な水辺空間の創出、水辺利活用を促進し、北海道らしい地域づくり・観光振興に貢献する「かわたびほっかいどう」プロジェクトを推進している。本稿では、コロナ禍における、自治体や観光団体、NPO等と連携した取組を紹介するものである。

キーワード：地域活性化、まちづくり、地域交流・連携

1. はじめに

国土交通省では、2030年に訪日外国人旅行者数を6,000万人まで増やす目標を掲げている。北海道には、豊かな自然環境、雄大な自然景観や生産活動の中で形成された農村景観、独自の歴史・文化、多様な都市、安全で高品質な農水産物等、アジアの中でも特徴的で魅力的な観光資源が存在し、アジアからの訪日旅行者による旅行先としてのニーズが高い地域である。観光立国の実現に向けて更なる高みを目指し、北海道が果たす役割をますます高めていく必要がある。

北海道開発局の河川部門においては、「かわたびほっかいどう」プロジェクトとして、世界水準の観光地の形成を目指し、四季折々の川の自然環境や景観、水辺活動やサイクリング環境等、河川空間が有するポテンシャルを活用したツーリズムを平成29年度から推進している。具体的には、川に関する情報を効果的に発信し、住民や観光客の水辺利用や周遊のサポート、各地域・分野の関係者間のネットワーク強化による水辺利活用に係るニーズの発掘・マッチングの促進、地域を連携した魅力的な水辺空間の創出等により、地域づくり・観光振興に貢献する取組を推進するものである。

本稿では、コロナ禍における、自治体や観光団体、NPO等と連携した取組を紹介するものである。

2. 地域の団体と連携した取組事例

令和2年2月以降、新型コロナウイルス感染症拡大を踏まえて、一般の方を対象としたイベントや取り組みは中止となったり、規模を縮小してさらにイベント内容に応じて必要な感染防止対策を取ったうえでの実施となって

いる。地域の団体と意見交換を行った結果、そのような状況となってから既に2年近くが経過し、先行きが見えない中で各団体からは会員のモチベーション低下による会員減少や活動できないことによる資金確保の課題などがあることが浮き彫りとなってきている。

そのような状況において、地域の各団体と連携し実施した取組について紹介する。

(1) 空知川川下りと露頭炭（空知シーニックバイウェイとの連携）

空知シーニックバイウェイと「かわたびほっかいどう」が連携し、空知川メインルートの体験ツアーを令和3年10月2日に実施した。空知川を川下りしながら、松浦武一郎が発見したとされている河岸に露頭している炭層（露頭炭）を見てから、令和元年に日本遺産「炭鉄港」として認定されている「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」を見学するもので、「炭鉱遺産」という地域資源を活用した体験ツアーとなっている。空知川露頭炭は、空知炭田の端緒となったとされ、北海道の地質百選に指定されており、貴重な炭鉱遺産である。関係する団体は、空知シーニックバイウェイ、赤平市、まち・川づくりサポートセンター、赤平ラブ・リバー推進協会である。



写真-1 空知川川下りと露頭炭の状況

川下りは、地元小学生を対象として実施することを計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大を踏まえ断念し、関係者のみで実施した。川下り当日には、各団体から計25名の参加者があり、参加者からは、「炭鉱時代を知らない世代の人も充分楽しめる。」「赤平市が炭鉱産業で発展してきた歴史を知るきっかけに十分な内容のツアーだった。」「ボートから見る景色は、「絶景」でリフレッシュできた。季節ごとに楽しめる景色が違うため、また体験したい。」といった感想を得た。



写真2 赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設

また、露頭炭周辺には陸上から直接露頭炭を見学できるスペースが無いため、河川維持工事と併せて露頭炭層を展望できるデッキを令和2年度に整備した。雪解け後には、デッキ整備に関して地域話題として新聞やテレビのニュースに取り上げられ、その結果地域の関心を高めることに繋がった。赤平市においては、地域からの問い合わせ対応を踏まえて、道道赤平奈井江線沿いに案内看板を設置した。多くの人が露頭炭の見学に訪れることを期待している。



写真3 展望デッキ整備状況



写真4 赤平市で設置した案内看板

(2) 千歳川川下りとサイクリング

シーニックバイウェイの支笏洞爺ニセコルート of the ウェルカム北海道エリアのメンバーでもある「支笏ガイドハウスかのあ」と連携し、平成3年10月17日に千歳川でカヌーとサイクリングを楽しむテストツアー「ちとせ野外の学校〜カヌー&サイクリングで千歳川を知ろう〜」を実施した。コースには、令和元年度に完成した根志越遊水地も含み千歳川河川事務所職員から事業や施設説明を行い治水や防災に対する理解を深めて貰うとともに、カヌーで川を下りながらサケの遡上を間近で観察するなど、千歳川に生息する様々な生き物を探す河川環境教育も盛り込み実施した。

当日は千歳市民20名が参加し、参加者からは、「カヌーからたくさんのサケが見れて興奮した。」等の感想を得た。

主催者からは、今後、防災教育等も追加したツアー実施に向けて検討する意向が示されており、今後の展開が期待される。



図-1 ルートマップ



写真5 千歳川川下りの状況



写真6 サイクリングの状況

(3) 幾春別川サイクリングと三笠ジオパーク

「三笠ジオパーク推進協議会」は、地元の「幌内炭鉱」、「幌内鉄道」等の産業の歴史、アンモナイトの発見等「石炭」の歴史に関係している。三笠市全体がジオパークとして指定されており、観光資源としても重要視され様々なツアーが企画されている。それらの中で幾春別川上流部のラフティングでは、地元の「NPO三笠森水遊学舎」がラフティングのサポートを担い、三笠ジオツアーとして連携し地域振興に寄与している。

「三笠ジオパーク推進協議会」と連携し、「道の駅三笠」を集合場所として、幾春別川右岸堤防治いと三笠市内を走行するテストツアーを令和3年10月10日に実施した。

今回の実施結果を受けて、来年度は三笠ジオパーク推進協議会主催の本ツアーとなる見込みである。



図-2 ルートマップ



写真-7 サイクリングの状況

(4) 北海道カメラ女子の会との連携

「北海道カメラ女子の会」と連携し、石狩川クルーズと川の博物館のモニターツアーを令和3年10月29日に実施した。

石狩川クルーズでは、普段乗ることのできない調査船「弁天丸」に乗船し、クルーズしながら「実際に見て感じる」治水事業を体感してもらった。川の博物館見学では、資料や展示物を見ながら説明を聞いて、治水事業の歴史を学んでもらった。

「北海道カメラ女子の会」は、北海道内に在住するカメラや写真が好きな女性があつまる会員数が約610名の北海道最大のカメラ女子のコミュニティで、市町村や企業とコラボして様々な魅力を冊子、会のHPやSNS等で発信し

ている。今年度は、前述の石狩川メインルートの体験ツアーにもモニターとして参加して頂き、SNSで情報発信していただいた。

当日は、6名の参加者があり、参加者からは、「自分たちの生活の中に治水事業の学びを落とし込むことができた。」「より身近なものとして、捉えることが出来るようになった。」「とても貴重な体験が出来た。」等の感想を得た。

今後も「北海道カメラ女子の会」との連携を強化し、情報を発信していく予定である。



写真-8 石狩川クルーズの状況



写真-9 川の博物館での説明状況

(5) 札幌都心を流れる豊平川での取組

豊平川においては、水辺の賑わいを創出する取組として、札幌青年会議所の企画で「札幌川見」を札幌市街地に隣接した幌平橋付近で平成 29 年から毎年開催している。



写真-10 幌平橋のライトアップの状況

豊平川の水辺で夏の夕暮れを過ごすことを「川見」と称し、音楽や飲食、催事を楽しむ場を創出してきた。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い令和2年から中止となっている。一方で、札幌青年会議所の有志の方からは、コロナ禍においても、コロナ禍だからこそ地域を活性化する取組を実施したいとの意向が示され、札幌市（都心まちづくり推進課）とともに取組実施に向けた意見交換や関係者による現地調査を実施した。

一方で札幌市（都心まちづくり推進課）では、近年発展が著しい創成東地区（南大橋付近～1条大橋付近に隣接した区間）におけるまちづくりの検討を進めており、令和元年度のワークショップの成果として、河川と創成東地区が一体の会場として、「まち」と「かわ」が繋がったものとして新たな価値観を提供することが提案されている。そのような状況を踏まえて、令和2年度には、テーマを「健康×ミズベ」として、ミズベでサウナやヨガ等の体験をメインに実証実験の実施を企画立案したが、コロナ禍を踏まえて実施できなかった。令和3年度には、創成東地区における「まち」と「かわ」が一体となった地域づくりに向けて、5月から勉強会を4回実施した。勉強会においては、川の利用に関わるルールや安全対策の必要性を共有するとともに、創成東地区のまちづくりと豊平川を関係者が協働で調査し、今後の利活用方法を検討した。令和3年も新型コロナウイルスの感染状況により、現地での実証実験の実施は困難であったが、これらの検討は今後の展開に期待されている。



写真-11 勉強会の状況

3. 課題と解決に向けた取組

今後、「かわたびほっかいどう」を推進する上で、地域で活動されている各団体の後継者不足、資金不足、資機材不足が課題としてあげられている。

これらを解決する方法の1つとして団体間の連携が必要と考える。

各団体の後継者不足の課題に対しては、まず川や川に関わる取組について、地域の方に理解を深めて貰うことが重要と考える。これまでの取組においても、地域の方が地域の魅力を知らなかったとの意見を伺うこともあつ

た。川でのイベントや取組を「かわたびほっかいどう」として統一的にホームページやSNSを使った情報発信に力を入れているが、開発局職員の発想だけでは情報発信に対して不慣れであり限界があると考え。今年度は、川に関する情報を効果的に発信するため、水辺の魅力を体験・見学し、写真と言葉を使って一人でも多くの人に川の魅力を伝えることを目的として、「北海道カメラ女子の会」とモニターツアーを開催した。学びの内容や純粋で率直な感想を投稿し、体験談として発信していただくことで、川に対する関心を高める活動に繋がる可能性がある」と期待される。

資機材不足との課題に対しては、今年度実施した空知川川下りにおいて、水位の低下により座礁の恐れがあったことから通常使用しているEボートが使用困難と判断され、急遽他団体からラフティングボートを借受ることとなった事例がある。1団体では対応しきれないことも複数の団体が連携することで助け合うことができた好事例であると考え。

このような地域の各団体が、「つながる」取り組みの一環として、地域で活動する各団体との情報共有や意見交換の場を設置することを検討している。地域の団体と団体を「つなぐ」ことで、地域の活性化や振興を図り、北海道の魅力を最大限に引き出すことに繋げていきたい。

4. 今後の展開

(1) ダム湖におけるアイスカルーセル

北海道ならではの冬の観光資源コンテンツ構築と地域振興も「かわたびほっかいどう」を推進するうえでの課題の1つとなっている。

札幌開発建設部管内のダムにおいては、冬期間に結氷したダム湖において地域と協働した取組が検討されており紹介する。

夕張スーパーダムでは、令和2年度にアイスカルーセルの実証実験を行っており、その結果を踏まえて、今年度は地域の各団体（夕張商工会議所、夕張市建設協会、地元企業等、夕張川ダム統合管理事務所）が【ゆうばりde街あそび実行委員会】を結成し、実行委員会主催の「ゆうばりde冬あそび2022～こおったダム湖のメリーゴーランド～」を開催予定である。さらに、金山ダムでは南富良野町まちづくり観光協会、南富良野町、空知川河川事務所金山ダム管理支所が、定山溪ダムでは定山溪観光協会、TOYAMA推進協議会、豊平川ダム統合管理事務所がそれぞれ連携し、冬季における地域振興のコンテンツ造成に向けて取組を進めているところである。

冬季における河川管理施設を活用した地域振興に寄与する取組が推進されることが期待される。

なお、アイスカルーセルとは、フィンランド発祥の冬の遊びで、氷を円状に切り抜き湖上で回転させる氷のメリーゴーランド。ダム湖を中心とした360度に広がる

大絶景を非日常的な視覚感覚で楽しむことが出来るものである。



写真-12 アイスカーセルの状況
(夕張シュエパロダム)

(2) 河川堤防でのひつじ放牧

北海道では、羊の文化が根付いており、冷蔵庫がない時代に、河川敷などに食用の羊を生きたまま集めておく場所があった。

当別町の石狩川右岸堤防において「ひつじ」の放牧除草を河川維持管理コストの縮減と環境への配慮の観点から、今年度、試行的に実施した。地元の石狩ひつじ牧場の協力を得て、最大 10 頭を令和 3 年 7 月 16 日～11 月 2 日まで放牧した。堤防の草を食べるか危惧されていたが、もりもり食べて体重の増加も確認されている。



写真-13 ひつじ放牧の状況

今後、河川空間において「ひつじ」とのふれあい北海道の歴史と文化を学ぶ機会とするとともに、周辺施設を活かした地域振興へ資する取組に関して検討を続け、当別町、石狩ひつじ牧場、「道の駅とうべつ」とも連携を図る予定である。

また、当該地域の当別町太美地区は、札幌市に隣接する田園都市であり、令和 4 年には、JR ロイズタウン駅の開業やアミューズメント性を兼ね備えたロイズふと美工場拡張も予定されているなど、今後、人を呼び込む流れが加速し、発展が期待される地域である。

5. さいごに

本稿では、札幌開発建設部における「かわたびほっかいどう」の取組の一部について紹介した。

これらの取組は、地域の各団体の活動や連携がベースとなっているが、単にツアーやイベントを実施するだけではなく、地域の団体との連携が結果的に「かわたびほっかいどう」へ寄与することとなり、「かわたびほっかいどう」が地域へ浸透することで地域振興へ資する相乗効果が期待されている。

水辺にはその地域特有の資源が眠っており、水辺にはその使い方によって、新たな価値を生み出す可能性も秘めている。

札幌開発建設部としては、このような取組を今後も推進し、関係機関や地域のキーマンとのネットワークを構築し連携を強化することで、魅力的な川に関する情報を発信するとともに、魅力的な水辺空間の創出、水辺利用の促進していきたいと考えている。



かわたび
ほっかいどう

